

ユーラシアを歩く会 行動報告書

The Trans-Eurasia Walking Journey Program

1. 計画コース概要

提出日:

地域分類	日本西部	区間番号	7
実施期間	2011年 4月 9日～ 4月 13日		
計画区間	出発地 鳥取砂丘 ～ 到着地 城崎温泉	参加人数	7名

2. メンバー表

No	役割分担	氏 名	期	備 考
1	リーダー	友松 知宏	8期	
2		江守 善昭	5期	
3		鹿島 静哉	8期	
4		生和 光朗	21期	9, 10 日のみ歩行。香住で別れた
5		生和多恵子	21期	同上
6		友松 和子	友松家内	10 日に一時帰宅、11 日に竹野で復帰
7		田中 加菜	友松友人	9 日のみ歩行

3. 現地での歩行結果

(注: →は歩行、⇒は JR、バス、レンタカー等)

	年月日	出発～到着	区間距離	天候	宿 泊
1日目	4月 9日	鳥取砂丘バス停 8:50 出発 →岩美海岸→居組→諸寄 ⇒17:02 発 JR にて浜坂駅 ⇒17:25 発町営バスで湯村温泉 17:48	Km 21.9	晴れ	湯村温泉 橋本旅館
2	4月 10日	湯村温泉発 7:45⇒浜坂 8:08 →加藤文太郎墓地(墓参) →加藤文太郎記念図書館 9:20 訪問 →浜坂漁港(山陰海岸観光船遊覧) 友松) 浜坂→諸寄(友松) ⇒14:10 発 JR にて久谷駅 14:27 本隊) 浜坂 13:00→久谷(合流)→餘部駅 ⇒16:16 発 JR にて香住 16:26 ⇒宿の送迎車 友松和子)所要にていったん帰宅	2.0 20.4	晴れ	香住大乘寺 民宿応挙前
3	4月 11日	江守、鹿島) 香住 7:31JR⇒餘部駅 餘部 7:43→香住駅 香住発 9:43JR⇒佐津 9:51(友松に合流) 友松) 香住 7:15 発→柴山→佐津駅 10:00(合流) コンビニで弁当購入 →12:15 浜須井(喫茶店シーポイント)昼食 →14:10 竹野海岸休暇村(和子合流) ⇒竹野港(魚市場競りを見学)	7.3 17.7	雨	竹野海岸 国民休暇村

4	4月 12 日	竹野海岸休暇村 8:15 発 → 鑄物師尻峠 9:45 → 城崎温泉駅前 11:10 到着 以後レンタカー) ⇒ 出石町(昼食)街並み観光 ⇒ 豊岡コウノトリ生息地観光	9.7	晴れ	城崎温泉 丹波屋
5	4月 13 日	6:45 城崎温泉駅まえにて解散			
		合 計	79.0		

区間概念図 : 別紙ー 1

4. 見聞録

ルートの状況

昨年歩いた日本西部 6-2 コースの終点「鳥取砂丘バス停」が今回の出発点である。

初日は砂丘の縁に沿って平坦な道を岩美海岸に向かい、岩美からは世界ジオパークに認定されたリアス式海岸の道に入った。

海岸線が入り組み、集落と集落のあいだは岬の台地が横たわり、100mほどのアップダウンが続いて、距離が短い割にきついコースであった。とくに 11 日は終日雨天で、風もつよく、体力を消耗した。自動車地図の距離をもとに 1 日当たりの歩行距離を設定し、地形を考慮にいれてなかったのが要因。雨季や降雪期には、配慮が必要である。

しかし景色は抜群で、車の往来もなく、気持のよい歩行を楽しんだ。海面から屹立する岩壁と黒く見えるほどに澄んだ水が美しい。ちょうど水仙が満開の季節で、疲れた目を癒してくれた。

途中、浜坂で加藤文太郎（「単独行」の著者、新田次郎「孤高の人」のモデル）の墓と記念図書館を訪問し、ユーラシアを歩く会のエッセイ集を献納した。

鹿島、友松は 50 年前（昭和 36 年 3 月）に同じルートを逆にあるいた。思い出深いコースである。

歩行方法

全コースを一組で順方向に歩く予定であったが、天候や交通機関の時間の都合等で、2 か所を二組に分かれて歩行した。分行したのは下記の 2 区間である。

4 月 10 日[諸寄～久谷]

計画では、宿を早朝に出立し、浜坂から JR で（前日の終点）諸寄にもどり、浜坂の加藤文太郎記念図書館に向かって歩行する予定であったが、あてにしていた湯村から浜坂に向かう始発バスが日曜日は運行しないことがわかり、予定を変更。歩行は午後からとして、午前中、文太郎氏の墓地と記念図書館を訪ね、遊覧船に乗り、午後一行は餘部に向けて出発。友松が諸寄まで歩行し、JR でとんぼ帰りして久谷で下車。本隊に合流した。

4 月 11 日[餘部～佐津]

計画では全員が香住から JR で餘部にもどり、そこから歩行する予定であったが、天候の悪化が予想されたので、計画を変更。友松が香住より竹野へ向けて出発。江守、鹿島が香住より餘部に JR でもどり、香住まで歩行。そこから JR に乗車し、佐津で下車。友松に合流した。

その他

生和夫妻は鳥取砂丘から餘部までを歩行し、香住で別れて城崎温泉経由で帰京した。
友松和子は 4 月 10 日、体調不良のため久谷で JR に乗車、餘部駅で合流。宿に入る。
その晩、所用のため香住から JR でいったん米子の自宅にもどり、11 日竹野海岸の宿で復帰した。

歩行最終日 12 日は海岸線沿いに日和山経由で城崎に入るコースと、竹野より鋳物師戻峠経由で城崎に入るコースの二つを用意したが、後者の鋳物師戻コースを選択した。

表敬訪問

1. 加藤文太郎墓地 (4 月 10 日/8:30)

広い墓地のなかで、同姓の墓銘がたくさんあるので、地元の有志の手で、「孤高の人 加藤文太郎の墓」の標識が建てられてある。

線香と花を手向け、「きままな旅人」と「放浪の旅」を歌った。

2. 加藤文太郎記念図書館 (4 月 10 日/9:20)

開館は 10:00 であるが、事前に連絡しておいたので、9:30 に図書館へ入館した。

2 階の 1 室が文太郎氏の展示室になっており、山の道具やスキーなどの遺品が展示されてあった。われわれの現役時代 (50 年前) にもまだ使われていた飯ゴウやトタンで修理された単板のスキーや和竹のストックなど、懐かしく当時を思いだしながら観た。

加藤氏は知る人ぞ知る山の先人で、部室の棚にあった氏の著書「単独行」に 50 年ぶりに再会した。

館では「但馬浜坂ふるさとの会」の上島元子代表と「加藤分文太郎山 (サン) の会の田中正会長とお会いしてエッセイ集の贈呈をしたが、時間がなく、あまりお話できずお別れした。

観光

1. 浜坂漁港観光船 (4 月 10 日/11:00)

約 1 時間の遊覧クルージングを楽しんだ。

ここは世界ジオパークに認定されたリアス式海岸の特徴が顕著な場所で、岩壁に刻まれた地層の跡をみると、この場所で激しい地殻変動があったことがしのばれる。

船長の川口さんは気のおけない人で、戻りの航路は自動運転に切り替え、われわれを運転席にすわらせて、写真を撮らせたりした。川口さんは、この船のほかにもう 1 艘の古船を持っており、その船に今上天皇をお乗せしたことや、休日はその船で釣りをしているなど笑いながら話してくれた。

2. 出石町 (4 月 13 日/12:00)

城崎温泉から 20Km ほど南にある城下町で、皿そばが名物。30 軒ほどの蕎麦屋が軒を連ね、湯めぐりならぬ「蕎麦めぐり」があり、観光センターで 1600 円だして巾着袋に入れた昔の銅銭 3 枚をもらい、それを使って好みの蕎麦屋 3 軒で皿そばを 3 枚ずつ食べるこ

とができる。3軒まわって全部食べるつもりだったが、最初に入った店「大門」で、香住で泊った宿の紹介だという触れ込みに、大サービスの甘いものが出て、そのため腹がふくれて2軒で降参した。

昔の芝居小屋を復興した出石永楽館では、客席だけでなく、奈落の底まで見せてもらい、舞台上で歌舞の所作をしたり、歌舞伎小屋の雰囲気を楽しんだ。

3. コウノトリの郷公園

かつてこの一帯で生息していたコウノトリの繁殖と放鳥をしているコウノトリ文化館を見学した。現在育成中の雛はいなかったが、まえの空き地に成鳥が2～30羽がたむろしていた。

城崎温泉への帰りの道すがら、営巣している場所があり子育て中とのことで、寄ってみた。遠目で確とは見えなかったが、10mほどの円柱の上の巣に雛が1羽動いているように見えた。

自然環境

コースのほとんどが世界ジオパークのなかにあり、学問的な興味とは別に、景観の美しさに感動した。とくに11日の香住～竹野海岸は天候が悪く海が荒れて、(歩くのは難儀であったが)これぞ日本海というべき景色を目にすることができた。

リアス式海岸の入江ごとに集落があり、その間は岬の壁で隔絶されており、昔は隣の村へ行くのも難儀であったろうと想像された。道は集落の海拔0mから岬の台地に100～150mの起伏を伴い、天候が悪い時の長距離歩行はつらい。

今年は寒さが遅くまで続いたせいか、最終日の城崎温泉でようやく桜の満開に出会った。他の花も一斉に咲きそろい、海岸の道端に咲く大輪の水仙が美しく感じられた。

私は見ていないが、タヌキなどの小動物が道路を横切ったらしく、9日の湯村温泉行きのバスのなかからは、イノシシが餌をあさっている場面にも出くわした。

食べ物・酒・その他

安い宿を選んだわりに、食べ物はよかった。しかし歩く範囲が狭い地域に限られているため食材がほとんど同じで、各宿とも量が多くて、食が細くなった世代はもてあまし気味となる。最後の宿ではラップをもらい、朝食のおかずとご飯とおかずを包ませてもらった。宿の主人も「常連さんは心得ていて、それなりの量にしている」と話していた。

今回のコースにビジネスホテルはなかったが、素泊まりでコンビニ弁当がよいのかもしれない。

湯村温泉で特区認定されている「どぶろく」を飲みたかったが、遅く着いたため酒屋も閉まっており、入手できなかった。

メディアの取材

地元の日本海新聞と神戸新聞2紙の取材を受けた。いずれも、支局が浜坂にあるため、加藤文太郎氏とのかかわりを中心に取材された。

5. 人々との交流の記録

訪問先

今回の歩行は、ほとんど人のいない山道続きで、途中通過する漁村もひっそりとして、あまり人々との交流はなかった。 要所々々で通過証明を書いてもらったが、東日本大震災への遠慮もあって、交歓のパフォーマンスで盛り上げることもなく、つつましい歩行に終始した。

初日、一緒に歩いた田中加菜さんのご主人が、仕事を終えてから、加菜さんを車で迎えにこられ、いったん別れた後、追っかけてきて、展望台で記念写真に収まってもらった。初対面であったが、ほのぼのとしたお人柄と感じた。

10 日の加藤文太郎記念図書館では但馬浜坂ふるさと塾の上島元子代表と加藤文太郎山（サン）の会の田中 正会長にお会いしたが、時間がなかったうえ、神戸新聞の取材に時間をとられて、ほとんどお話しもせずにお別れした。 年内に私たち（友松）だけでも再訪しようかと考えている。

取材頂いた日本海新聞の平田早苗さんと神戸新聞の風斗雅博さんとは、取材を通じて親しくお話しできた。

平田さんは事前にユーラシアを歩く会のホームページを見ておられ、かゆいところに手の届く取材をされたが、風斗（フウト）さんには事前に知らせていなかったのと、現場での時間もほとんどなかったために、歩行の先々まで何度も携帯電話でインタビューを受け、最終日（解散）の朝刊に間に合わせてもらった。お疲れ様でした。それぞれにお二人の人の柄の滲むよい記事が掲載されました。

後日メールでのお礼のやりとりで、平田早苗さんは加藤文太郎さんの墓地の近所にお住まいとのこと、取材中、平田さんのインタビューの端々に加藤さんへの思いを感じた理由がわかった。

6. 健康・安全面の記録

友松和子が不調で、途中1ヶ所（久谷駅～餘部）をJRに乗せが、最後の鋳物師戻峠も何とか超えて、城崎まで歩行した。

生和光朗氏も体の痛みを出発前に知らせてきたが、何事もなく元気に2日間の歩行を終え、香住から帰京された。

出発前に見た「4月10日以後は安定する」という長期予報を鵜呑みにして、一時帰宅の和子に雨具一式をもち帰らせてしまい、11日の悪天候のなかをうすいビニールのポンチョ1枚で歩行し、メンバーに心配をかけた。きちんと翌日の天気予報を確認しなかったリーダーの落度。反省。

7. 総費用

個人	航空運賃(東京～鳥取)等	略
	宿泊、飲み物費(4泊)	41, 100
	昼食費(4回)	4, 900
	交通費(JR、バス、レンタカー)	2, 800
	その他(遊覧船、入場料等)	6, 400
	合計	55, 200

8. 記録写真・ビデオなど



- 鳥取砂丘バス停（4月9日）
／まずは出発
／鹿島さんにとっては、50年ぶり
の山陰歩行



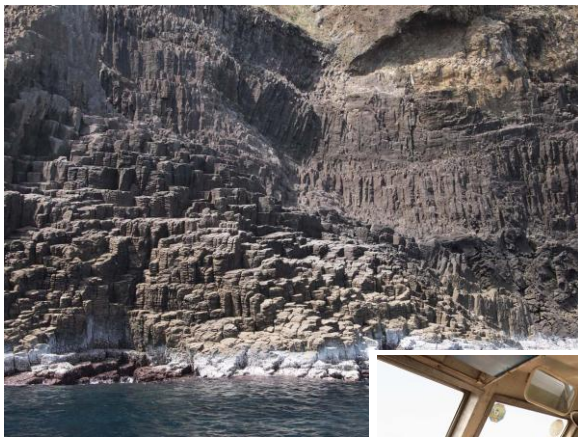
- 岩美海岸（4月9日）
／いまのところ全員元気
／前列右端が田中加菜さん



- 加藤文太郎氏墓地（浜坂）（4月10日）
／線香と花を供え、「気ままな旅人」と
「放浪の旅」を歌った



- 加藤文太郎記念図書館（4月10日）
 - ／加藤さんの遺品や新田次郎のエッセイを展示、
 - 隣室は山の本を蒐集
 - ／ユーラシアを歩く会エッセイ集を献納
 - ／赤服は上島元子さん（ふるさと塾代表）



- 浜坂港観光船（4月10日）
 - ／柱状節理の岩壁が迫る
 - ／江守善昭船長（操縦歴0年）



- 久谷付近（4月10日）
 - ／諸寄からのJR車窓より撮影
 - ／線路下の道を歩くメンバー
 - 列車を見上げて手を振ってくれた



- 久谷駅ホーム（4月10日）
／下車したのは友松一人
／満開の水仙が出迎えてくれた



- 香住小学校（4月11日）
／50年まえ鹿島、友松ら6名が泊めてもらった思い出の場所
／当時は木造校舎だった



- 浜須井海岸（4月11日）
／この日は終日雨と風だった
／この暗さが日本海の醍醐味か？



■ 竹野漁港の競り市（4月11日）
／宿の国民休暇村の車で見学に行った
／悪天候のせいか、漁が少ない



■ 鑄物師戻峠（4月12日）
／イモジモドシと読む（秘話がある？）
／トンネルを抜けるとそこはもう城崎



■ 城崎温泉（4月12日）
／暖かくなり、桜が満開となった
／久しぶりに街の賑わいに出会った



■ 出石町永楽館（4月12日）
／昔の芝居小屋を復元、歌舞伎公演がある
／善之助の大見得 『江守屋！』



■ 城崎温泉駅（4月13日）
／6：45 無事に解散した
／またご一緒しましょう See You！

8. 新聞記事

[日本海新聞]

日本海新聞

2011年(平成23年)4月10日 日曜日

加藤文太郎に思いをはせながら、曲がりくねった峠道を歩く
メンバー＝9日、新潟県町居組



加藤文太郎に思いはせ

首都大東京ワンゲル部OB会

ユーラシア大陸を徒歩横断し、イギリスから東京まで約2万kmの旅をしている、首都大東京(旧東京大学)ワンゲル部OB会のメンバーが9日、山陰海岸ジオパークエリアの鳥取市から新潟県まで歩いた学生時代に読んだ単独行の著者、同出身の加藤文太郎に思いをはせながら、入り組んだ海沿いの道を歩いた。10日には、加藤文太郎記念図書館を訪問し、活動をつづけたエッセー集を寄贈する。

同OB会(江守昭会長)は、会員有志で「ユーラシアを歩く会」をつくり、1999年にロンドンを出発、60〜70代のメンバーを中心に数人でグループを組み、リレー方式で歩いている。14年間かけて、ヨーロッパ、トルコ、中国など18カ国を巡り、昨年10月に帰国。対馬から終着地・東京を目指している。

山陰から但馬を歩く上で、メンバーは学生時代から憧れる登山家、加藤文太郎が育った町を訪ねたいと、浜坂を巡るコースを企画した。

新潟県町居組の会は14年間の活動を現地でも撮影し写真集や歩行者の投稿をまとめた一冊を寄贈する。中メンバー6人。列の先頭を歩く友松さんは、「われわれにとって昔も加藤文太郎は近寄りた存在で、孤高の人。その、彼の書籍や資料のある施設に置いてもらえる」とは本当にうれい」と目に輝いた顔をほころばせた。

一行は、12日までの4日間、海沿いのルートで城崎まで82・3kmを歩く予定。

平田卓郎

[神戸新聞]

神戸新聞 2011年(平成23年)4月13日 水曜日

ユーラシア大陸を徒歩で横断してきた
首都大学東京(旧東京都立大学)のワン
ダーフォーゲル部OB会員がこのほど、
新温泉町を訪れた。憧れの登山家加藤文

太郎ゆかりの地、同町浜坂にある加藤文
太郎記念図書館で活動を記録した本を寄
贈した。

(風斗雅博)

憧れの登山家・加藤文太郎に"あいさつ"

「加藤文太郎の会」の田中正徳氏、活動記録した
本を手裏ファンバー・加藤文太郎記念図書館



ユーラシア大陸リレー横断の
首都大学東京ワンゲル部OB
OB会40周年で集まった会
員らが、1996年に「ユー
ラシアを歩く会」(旧川東
会)を結成、同年にイギリ
スのロンドンを出発し、1日
スランや港は40度にも

ゆかりの地 浜坂訪問

全行程20000キロ 活動記録の本寄贈

なる中国では時局を記すめ
ながら、昨年5月に韓国
を歩き終えた。
一行は昨年10月から日本の
横断をスタートし、今月9日
に新温泉町に到着した。加藤
文太郎出生の地を前に、メン
バーの友松知宏さん(右)鳥
取県米子市は「何が何でも
立ち寄りたかった場所。(加
藤)小さいころ、この
山や海を眺めながら育ったと
思うと感激と誇り。メンバ
ーらは横断中に並行して、
各自の思いとともに活動記
録をつづった本「ユーラシア
大陸横断徒歩20000km
の旅」(約600ページ、2
年以上かけて独自に作成し
た。
訪れた加藤文太郎記念図書
館では、本を地元住民らつ
く「加藤文太郎の会」の
田中正徳氏に手渡した。同
OB会の江守善昭会長(左)神
奈川県横浜市の「この本が
きっかけで世界を歩きたいと
思ってくれる人がいたらうれ
しい」と語っていた。

通過証明

別途添付

以上

報告 友松知宏